【梅本克己氏年譜　略歴と論文タイトル一覧】

【梅本克己氏年譜　梅本千代子編『梅本克己短歌抄』より

明治４５（１９１２）年
３月２６日、栃木県下都賀郡栃木町にて、父＝鶴吉（明治１４年３月２３日生、区裁判所判事）、母＝セツ（明治２０年５月５日生、宇都宮市塙田町１３６、明治４２年２月１日、鶴吉と結婚）の次男として出生。本籍地、神奈川県小田原市新玉４丁目５５７番地。

大正２（１９１３）年　１歳
４月２２日、母セツ、死去。

大正３（１９１４）年　２歳
５月５日、鶴吉、中村マサ（明治２１年７月１日生、神奈川県足柄郡岡本村塚原、中村藤蔵長女）と結婚。

大正４（１９１５）年　３歳
１月、鶴吉長女、数子出生（長野県下伊那郡飯田町上３４９７）。

大正５（１９１６）年　４歳
７月、鶴吉３男、正己出生（水戸市大町５６５）。

大正７（１９１８）年　６歳
４月、群馬県高崎南尋常小学校入学（一学期まで）。同月、鶴吉二女、満子出生（新潟県南蒲原郡本成寺町大字新保７４２）。
７月、本成寺小学校へ転校。

大正８（１９１９）年　７歳
７月、新潟県柏崎小学校へ転校。

大正９（１９２０）年　８歳
６月、鶴吉四男、由己出生（新潟県刈羽郡柏崎町住吉野１３３１）。

大正１０（１９２１）年　９歳
４月、千葉県一宮小学校４年次へ転校。

大正１３（１９２４）年　１２歳
３月、一宮小学校卒業。４月、高等科進学。

大正１４（１９２５）年　１３歳
４月、千葉県立安房中学校入学。

昭和５（１９３０）年　１８歳
３月、同校卒業。

昭和６（１９３１年　１９歳
４月、水戸高等学校文科甲類入学。鶴吉、静岡県吉原へ転任。

昭和９（１９３４）年　２２歳
１月９日、父鶴吉死去。３月、水高卒業。４月、東京帝国大学文学部倫理学科入学。９月より和辻哲郎の指導を受ける。

昭和１２（１９３７）年　２５歳
３月、同科卒業。卒業論文＝「親鸞における自然法爾の論理」。
４月同大学院へ進学。

昭和１３（１９３８）年　２６歳
４月、文部省教学局に雇員として就職。・

昭和１４（１９３９）年　２７歳
８月、財団法人国際文化振興会編纂室に勤務。

昭和１６（１９４１）年　２９歳
秋頃、桐越千代子（大正５年３月２２日生、東京市京橋区弥左衛門町１ノ１）と婚約。

昭和１７（１９４２）年　３０歳
１０月２８日、水戸高等学校教授発令。水戸市黒羽根町に居住。

昭和１８（１９４３）年　３１歳
５月１６日、桐越千代子と結婚。水戸市東原、小林方に移る。

昭和１９（１９４４）年３２歳
４月、水戸市五軒町窪田敏男方に転居、さらに同市砂久保に移る。

昭和２０（１９４５）年　３３歳
４月、安井校長より授業取り上げられる。７月、水戸市袴塚に移る。８月２日早暁、水戸空襲。１０月１０日～１０月１４日、水高スト。同１５日、安井校長退陣。同１６日、関泰祐、一高教授より水高校長として着任。

昭和２１（１９４６）年 ３４歳
６月、民主主義科学者協会水戸支部結成に参加。７月、８月始め、「人間的自由の限界」執筆、８月９日、和辻哲郎宛て発送。

昭和２２（１９４７）年 ３５歳
「人間的自由の限界」（『展望』２月号）、「親鸞について—異端とは何か—」（『知と行』８月号、大東出版社）、「唯物論と人間—マルキシズムと宗教的なるもの—」（『展望』１０月号）、「理想への両支柱—実存的課題とマルキシズム—」（『帝国大学新聞』１０月２日号）。
暮頃日本共産党に入党。

昭和２３（１９４８）年 ３６歳
「実存追求の場所—実存主義とマルキシズム—」（『思潮』２月号、昭森社刊）、「無の論理性と党派性—田辺哲学批判、特に第二次宗教改革の予想のために—」（『展望』３月号）、「唯物弁証法と無の弁証法」（『理想』３月号）、「批判と協同—小松氏の批評に対して—」（『理想』６月号）、「虚妄の実存—日本的抒情性の批判—」（『個性』７月号、思索杜刊）、「平和のための条件」（『次元』８月号、次元社刊）、『哲学の探求』（赤岩栄・真下信一編、河出書房刊）に「唯物弁証法と無の弁証法」再録。「主体性とニヒリズム」（『思索』８月号）、「主体性と階級性—松村一人氏の批評に答えて—」（『理想』１１月号）、「弁証法的物質とその自覚の論理—松村一人氏の批判に答える—」（『理論』９月号）、「唯物史観と道徳—主体性問題によせて—」（『展望』９月号）、「作家への依頼」（『人間』１０月号）、真下信一編『主体性論争』（白楊社、１９４８・１０）に「協同と批判」再録、「唯物論と自覚の問題」（『哲学評論』１２月号）、松村・梅本対談「唯物論と道徳—その現在の課題について—」（『哲学』１２月号、思索社刊）。
９月２６日、東原宿舎に移転。

昭和２４（１９４９）年 ３７歳
「民衆に捧げる智識」（『自由の旗の下に—私はなぜ共産党員になったか—』三一書房刊、４月３０日）、「唯物論的立場と観念論的立場—人間の変革—」（『思索』７月号）、「田辺哲学の弁証法」（『弁証法ノート』所収、潮流社刊）、「組織と人間—主体性論争の後に—」（『理論』７月号）、「共産主義と暴力の根源—猪木正道批判—」（『展望』１１月号）、「理論と実践の問題」（『哲学講座』Ｉ『哲学の立場」所収、筑摩書房刊、１２月）、『唯物史観と道徳』（三一書房刊、１２月３０日）。
１月、「社共合同」にさいし、党籍公然化。

昭和２５（１９５０）年 ３８歳
『新日本代表作選集』第７巻『哲学思想篇』「ヒューマニズム」の項に「主体性とニヒリズム」再録（実業之日本社刊、２月）、「第三の立場」（『悲劇喜劇』３月号）、『唯物論入門』（アテネ文庫、弘文堂、３月２５日）、「唯物論と歴史—或いは唯物史観と唯物史観—」（『理論』４月号）、「日本人としての自覚について—現代文明論のための覚え書—」

（『人間』４月号）、「唯物論と無神論」（『理想』６月号）、「たった一つの美しいもの」（『愛になやみ死をおそれるもの―今日を生きぬく心―』理論社刊、１１月）、『近代の思想』「ドイツ」（高桑純夫編、毎日ライブラリー、１２月）。
４月、水高消滅により廃職、レッド・パージ。７月１４日、人事院公平委員会に提訴。９月、結城哀草果と大洗。作歌はじめる。

昭和２６（１９５１）年 ３９歳
「大学教授の政治感覚―竹山道雄氏の『学生事件の見聞と感想』について―」（『人間』２月号）、「主体性論の現段階―その経過と今後の展望―」（『思想』３月号）、『現代哲学辞典』（出隆・柳田謙十郎編、岩崎書店刊、５月）「実存主義」の項目担当、「実存主義と共産主義」（『理想』９月号）、「三木哲学と唯物論」（『思想』１１月号）、「実践論―どう展開すべきか―」（季刊『理論』別冊学習版第一集、１２月）。
初夏の頃、京都大学で講演。１１月２５日、お茶の水女子大で講演、「知性と良心について」。

昭和２７（１９５２）年 ４０歳
「共産主義的人間の形成」（『唯物論者』３月号）、「文学の思想性―事実を写すということ―」（季刊『理論』８月号）。
２月４日、東京女子大で講演。同６日、教育大で講演、「知識人の課題」。

昭和２８（１９５３）年 ４１歳
「弁証法的唯物論の伝統―毛沢東哲学理解のために―」（季刊『理論』３月号）、『人間論―実践論・矛盾論の研究序説―』（理論社刊、５月）、「書評、牧野周吉『西田哲学との対決』」（『思想』７月号）、「変革期の人間像」（『改造』１１月号）。

昭和２９（１９５４）年 ４２歳
『哲学入門―対話式入門講座』（三一書房刊、１０月）。４月、立命館大学文学部教授として京都に赴任するも、発病のため１０月辞任。

昭和３０（１９５５）年 ４３歳
５月１８日、清瀬療養所に入所。７月５日、第一回手術（左肺第三葉まで摘出）。

昭和３１（１９５６）年 ４４歳
「始元の弁証法―価値論争の理解のために―」（４月３０日、未発表）。
３月１２日、第２回目手術（気管支瘻）。

昭和３２（１９５７）年４５歳
２月１１日、第３回手術（左肺部全摘）。

昭和３３（１９５８）年４６歳
４月５日、退院し、水戸に帰る。５月１８日、トラックにひかれ、骨折、約１カ月の入院生活を送る。
７月５日、水戸市赤塚町２ノ１６４へ転居。１１月末より翌年７月にかけて、『アカハタ』に８回にわたり、エッセイを発表。

昭和３４（１９５９）年 ４７歳
「書評、務台理作『哲学概論―人類ヒューマニズムと第三の立場―』（『思想』２月号）、「提言―思想のひろば―」（『思想の科学』３月号）、「史的唯物論における原因と動機―心理主義・多元主義・実存主義に関連して―」（『思想』５月号）、「マルクス主義者の自由」（『現代の理論』創刊号、大月書店刊、５月）、「自由とはどういうものか―岡本清一『自由の問題』によせて―」（『図書』５月号）、「書評―アンリ・ルフェーブル著『哲学者の危機―教条主義者との対決―』」（『週刊読書人』２８５号、７月２７日）、「雑炊哲学の弁―森信成氏にこたえて―」（『現代の理論』第５号、９月）、「書評、山田宗睦著『現代哲学の設計―精神的生産論―』（『週刊読書人』９月１４日）、「主体性への断章―フロイトにおける革命と反革命―」（『論争』２号）、『過渡期の意識―哲学とは何か―』（現代思潮社刊、１１月）。７月、『現代の理論』事件にさいし、「私の疑問」と題する論文を『前衛』編集部宛に送るも、返送され、離党のきっかけとなる。

昭和３５（１９６０）年 ４８歳
「主体性―戦後唯物論と主体性の問題―」（講座『今日の哲学』Ⅳ「人間論」小松摂郎編、三一書房刊、２月）、「実践論―ガルガンチュアの研究家にできることは何か―」（『東京大学新聞』４０３号、２月２４日）、「現代における唯物論の問題」（『思想』３月号）、「偽善の道徳と真実の道徳―文部省道徳指導書批判―」（『教育』６月号、・国土社刊）。

昭和３６（１９６１）年 ４９歳
「現代の人間像―八公おめえが死んでいる―」（『茨城大学新聞』８９号、５月２０日）、「マルクス主義哲学における修正と発展」（『現代のイデオロギー』第一巻、５月）、「社会科学とヒューマニズム―絶望と実存と実践―」（『中央公論』１１月号）、『唯物論と主体性』（現代思潮社刊、１１月）。

昭和３７（１９６２）年 ５０歳
「『現在』の底への掘り下げ」（『週刊読書人』１月１日）、「断絶の中で」（『東大新聞』１月１日）、『人間論―マルクス主義における人間の問題―』（三一書房刊、１月）、「マルクス主義と近代政治学」（『現代のイデオロギー』第５巻、３月）、「書評、芝田進午『人間性と人格の理論―人閾性と疎外について―』」（『経済評論』４月号）、「書評、アンリ・ルフェーブル著『総和と余剰』」（『日本読書新聞』４月１６日）、「マルクス主義と国家の問題―疎外論に関連して―」（『唯物論研究』１１月号）、「抱き合せ論法の危険―六・一五集会、学生の暴挙非難声明をめぐって―」（『日本読書新聞』７月１６日）、「歴史的認識と価値決定の問題」（『思想』９月号）、「福本イズム」（『日本読書新聞』１２月３日）。

昭和３８（１９６３）年 ５１歳
「如是経序品」（『日本読書新聞』１月１日）、講座『戦後日本の思想』第１巻「哲学」（梅本編著）に「哲学における前衛性の問題―哲学における人間と政治―」を発表（現代思潮社刊、１月）、「書評、問題群の体系―『グラムシ研究』Ｉ―」（『日本読書新聞』５月２７日）、「ある落丁のステロ・タイプ―川上秀弘『梅本哲学批判ノート』について―」（『早稲田大学新聞』９０４～５号、５月３０日、６月６日）、「疎外とたたかうものの疎外（『唯物論研究』６月号）、「青春の情念の分析―中岡哲郎著『若い日の生き方』―」（『日本読書新聞』６月１０日）、「雑草という草はない」（『人間の科学』９月号）、『現代思想入門』（三一書房刊、１０月）、「あるがままとなるがまま―『加藤正全集』発刊によせて―」（『日本読書新聞』１２月２日）。
夏頃、水戸唯物論研究会結成、経済学研・党史研の２例会を１月１回ずつ開く。

昭和３９（１９６４）年 ５２歳
「一月通信」を『日本読書新聞』に連載。（①「ヒューマニズムの実験」１月１３日、②「年賀状のこと」１月２０日、③「十を捨てて十一につく」１月２７日、④「万事は大事にあらず」１月３０日）、「現代の対話中ソ論争とマルクス主義」梅本・佐藤昇（『現代の理論』創刊号〔復刊〕、河出書房新社刊、１月）、「唯物論における主体性の問題―今日の時点で何が残されているか―」（『思想』３月号）『増補人間論』（三一書房刊、３月）、「巨人と庶民―山本周五郎氏の歴史小説による“対等”の勝負―（『日本読書新聞』４月１３日）、「書評、柴田高好『マルクス主義政治学序説」（『図書新聞』７月４日）、「ちょっと気になること」（『太陽』６・７・８・９・１０月号）、「書評、藤本進治著『革命の哲学』と現代」（『大阪大学新聞』１０月１０日）、「或る回想」（『中央公論』１０月号）、「対談、革新思想の問題状況」梅本・佐藤・丸山（『現代の理論』１０・１１月号）、『マルクス主義における思想と科学』（三一書房、１２月）。

昭和４０（１９６５）年 ５３歳
「宇野弘蔵氏の批判に答える―理論と実践の結節点―」（『日本読書新聞』２月１日）、「ユートピア雑感―ユートピアとナショナリズム―」（『展望』３月号）、「思想の実験と理論の実験―マルクス主義と現代の課題―」（『世界』３月号）、「経済学の弁証法―日高普氏の批評に答えて―」（『思想』７月号）、「思想的連帯の根拠―今の時点での戦後２０年―」（『世界』８月号）。
４月２３・２４の両日水戸にて丸山真男、佐藤昇とてい談。７月２３日、昭和１９年１２月より同居中の千代子母、死去。１１月５日、大洗にて宇野弘蔵と対談。１２月１８日、友人島田雄次郎死亡。

昭和４１（１９６６）年 ５４歳
字野・梅本対談「社会科学と弁証法」（『思想』１・２月号）、「梅本・佐藤・丸山『現代日本の革新思想』（河出書房新社、１月）、「民主主義と暴力と前衛」（『民主主義の神話』現代思潮社刊、３月）、「人間わずか５０年…―講談『桶狭間』と高村光太郎『道程』―」

（『私の人生を決めた一冊の本』三一書房刊、４月）、『革命の思想とその実験』（三一書房、９月）、「国家・民族・階級・個人」（『展望』１０月号）、「私の古典一本居宣長『玉勝間』—」（『エコノミスト』１１月２９日号）。

昭和４２（１９６７）年 ５５歳
「勇どんのこと—或る転生—」（『思想の科学』１月号）、「評論・三島形而上学への疑問１『英霊の声』にふれて—」（『文芸』１月号）、『私の古典—本居宣長『玉勝間』—』（毎日新聞社、５月）、宇野・梅本対談「『資本論』と『帝国主義論』」（『思想』５・７月号）、『唯物史観と現代』（岩波新書、９月）、「ひとつの拠点」（『世界』１２月号）。
２月２８日、大洗にて宇野弘蔵と対談。

昭和４３（１９６８）年 ５６歳
「人間論の系譜と今日の問題状況」、「主体性の問題」（『岩波講座哲学』第３巻『人間の哲学』）、「思想の言葉」（『思想』３月号）、「労働力商品の特殊性—資本制生産の基本矛盾に関連して—」（『思想』５月号）、「戦後精神の基点」（きき手＝しまね・きよし、『思想の科学』５月号）、「搾取の論理と収奪の論理」（『思想』９月号）、「どんな支援をあたえるのか」（『中央公論』１０月号）、「革命的支援の論理」（『展望』一１月号）、「科学の客観性とは何か１降旗節雄氏の批判にこたえて一」（『日本読書新聞』１１月１８日）、「敵を知り己れを知る」（『展望』１２月号）、「降旗節雄氏の反批判にこたえる」（『日本読書新聞』１２月１６日）。

昭和４４（１９６９）年 ５７歳
「東大紛争—かくされた一つの問題—」（『展望』１月号）、「まず粉砕すべきもの—東大の場合—」（『展望』２月号）、「大学闘争と現代への挑戦—大学闘争における主体の論理と倫理—」きき手＝安東仁兵衛（『現代の理論』２月号）、「東大闘争と知識人」（『朝日ジャーナル』２月１６日）、「壊滅が訴えるもの—東大紛争をめぐって—」（『展望』３月号）、「形而上学の批判と認識論」（『岩波講座哲学』第１８巻『日本の哲学』）『唯物論入門』（清水弘文堂、６月）、「イデオロギーの方法論的位置」、「唯物史観と経済学」（梅本編講座『現代マルクス主義』第２巻、日本評論社刊、１０月）、「思想の言葉」（『思想』１２月号）。

昭和４５（１９７０）年 ５８歳
「何が返還されたのか—日米協同声明と私の見解—」（『世界』１月号）、「商品としての労働力とその矛盾—宇野弘蔵氏の批評に答えて—」（『思想』７月号）、「初期マルクスにおける疎外論の構造」（『現代理論』１０～１２月号（１９７１年〕１～３月号）。

昭和４６（１９７１）年 ５９歳
「科学とイデオロギー—宇野弘蔵氏の批判に答える—」（『思想』８月号）、「何を革命するのか—党派の論理と革命の論理—」（『朝日ジャーナル』９月６日）、『唯物史観と経済学』（現代の理論社、１１月）。.

『新いばらき』新聞（社長＝遠坂良一）「哲学者・梅本克己氏の生活と思想」を６回にわたり連載、さらにこれをめぐる読者１５人の感想文を連載し、日共の圧力で遠坂氏、社長辞任。

昭和４７（１９７２）年６０歳
『マルクス・コンメンタール』Ⅱ『経済学ー哲学草稿』第三草稿コメント（細見英氏論文への）、梅本・遠坂対談『毛沢東思想と現代の課題』（三一書房刊、１２月）。
２月２３日、義母マサ、死去。４月、遠坂良一氏、東風社創立、月刊誌『東風』発刊、これに梅本・遠坂対談を連載。

昭和４８（１９７３）年６１歳
１２月９日、新居（水戸市姫子２ノ７５３）に移転。

昭和４９（１９７４）年
１月１４日朝死去。小田原市の大乗寺に葬らる。
６月２０日『唯物史観と現代』第２版（岩波新書）。

昭和５１（１９７６）年
１月、宇野・梅本『社会科学と弁証法』（岩波書店）。

昭和５２（１９７７）年
２月より『梅本克己著作集』全十巻、刊行開始（三一書房）。

昭和５３（１９７８）年
６月同完了。